

長崎県みどりの食料システム戦略ビジョンでは、環境保全型農業の実現に向け、2030年までに有機栽培面積を664％へ拡大する目標が掲げられています。しかし、市場で流通している一般的な有機質肥料は化学肥料に比べて高価で、生産コストの低減が課題となっています。

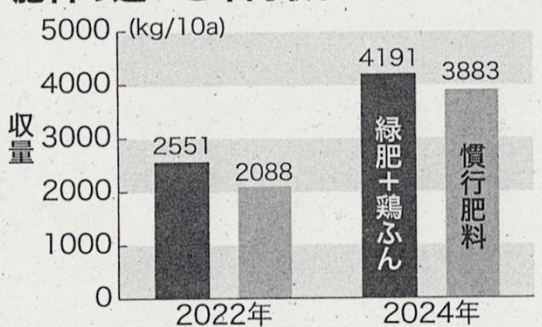
### 緑肥 + 鶏ふん堆肥 マルチ被覆

## 年内取りのレタスで収量など慣行と同等

込み、マルチで被覆することで、土壌水分を確保しつつ、養分の溶脱を抑えて肥効を安

定させるものです。この技術の年内取りレタスへの適応性を評価しました。その結果、レタスの収量や

肥料の違いと年内取りレタスの収量



養分吸収量は化学肥料を使った慣行栽培と変わらず、収穫後の土壌中のリン酸やカリウムなどの養分も蓄積傾向を示しませんでした。また、使用する資材が安価であることから、慣行栽培より施肥コストを抑えつつ、化学肥料を使用しない栽培体系を実現できます。

（長崎県農林技術開発センター 佐藤雄亮）